



こーひーぶれいく

流線型への憧れ

安達千波矢

Adachi Chihaya

少年時代にはよくありがちだが、小さいときから自転車、車、飛行機等の動く乗り物が大好きであった。電車に乗れば先頭車両に、羽田に行けばずっと飛行機の離着陸に見入っていた。よく父の車の助手席で近所の街をドライブしたり、当時、東京から祖父母の実家である長野に車で رفتりすることがとても楽しかった。エンジン音に合わせて車窓から流れる街並みや高速で流れる山並みの景色を目で追うことに、いつも何か新しい発見があって胸がときめいた。その当時、住んでいた3軒隣がポルシェの代理店、MIZWAの営業所だった。そこには、独特の流線型のポルシェが沢山あり、毎日、横目にいつも気になって通学していた。一体どんな乗り心地なんだろうかと、そしていつかは自分も乗ってみたいと幼心になんとなく感じていた。

自分が最初に購入した車は1988年大学院の時である。同じ研究室のHMさんから10年落ちの白のCIVICを8万円で購入した。なんとも愛嬌のあるヘッドライトとハッチバックの流線型は今でも強く記憶に残っている。彼は学部時代に自動車部だったので、安い車の色々なルートを持っていたのだ。この車はとってもコンパクトで、彼女（今の妻）と九州の色々なところに旅行に出かけてみた。ただ、今ではいい思い出だけど、博多駅の交差点のど真ん中でクラッチのワイヤーが切れて立ち往生したり、大学の門柱にぶつかったりして色々なトラブルもあった。当時は24時間研究室に居るような生活だったので、CIVICは本当に筆者の手足となってくれた車であった。1991年、大学院を卒業して、企業に就職して最初の夏のボーナスで速攻で購入した車、当時エディ・マーフィがTVで宣伝をしていた真紅のセリカである。赤い流線型に逸る心がかきたてられ

て買わずにはいられなかった。そして、とにかくスピードが出た。当時、静岡に住んでおり、1歳の長男を狭い後部座席のチャイルドシートに乗っけて、週末、東名高速や伊豆半島の海岸沿いをドライブしたのはいい思い出である。そして、1999年、米国のプリンストン大学の時には、流線型のスープラを購入した。折角なのでアメ車に乗ってみようかとも思ったけれど、同僚から故障の無い日本車を買った方がいいよと強く勧められた。米国では中古車が高止まり。ポスドクの安い給料では高額の新車の購入はとても無理で、確か10年落ちでも3,500ドルぐらい。雨漏り、エンジンのトラブルは日常茶飯事であった。近所の行きつけのGSのインド人から、修理に行く度に、“Hey my friend!”と言われたのには閉口した。結局、修理に3,000ドルぐらいの金額を払ったので、新車を購入した方がよかったのだろう。米国では車検があるような無いような感じで、かなり酷い状態の車も平気で流通しているから要注意である。また、テールランプが切れていたり、簡単なことでも結構Trooperに呼び止められた。運悪く、一度は任意保険が1日切れていて、裁判所に呼び出されクレジットカードで200\$の罰金を払ったりもした。とても貴重な経験だった。ただ、自宅のEast Windsorとプリンストンの15kmの往復は緑のトンネルの中を風を切りながら疾走する感じがとっても好きだった。プリンストンでの研究生生活も365日、24時間休み無しだったけれど、車に乗ることで気持ちのオン・オフの切り替えができたのは本当に助かった。昨年2017年、ついに流線型のポルシェ997、10年落ちの中古車が我が家にやってきた。サファイヤブルーの車体とテラコッタ色の内装のコントラストが素晴らしい。エンジンのO/Hは必要だが、独特の太いエンジン音、高速での加速感と安定性には技術者の拘りを感じる。そして、どこから見ても隙の無い流線型のデザイン。小さいときのMIZWAの記憶が目の前に蘇る。ようやく昔の君に出会えた。今度は少し長いつきあいになりそうかな。どんな素敵な時間と創造の空間を与えてくれるのか楽しみである。

(九州大学 最先端有機光エレクトロニクス研究センター)